

超奇天烈読物（奇想天外）

小説「ピンクの泪殺人事件」

舞台田舎町のとある倒れかかった病院

・配役：木山陽一 46才：糞まじめ。

その妻 47才

： 谷岡雄次 42才：几帳面なメモ魔

：谷岡の妻 綾野小路麗子 23才；

その家族 美香 12才：美土里 11才

： 小百合 25才；自称グラマラス美女

浜田つらら 37才；かかあ天下まっしぐら

浜田利雄 27才：

外畑和夫 40才；だらしのないオジサン：

遅刻常習者 真理子 38才

： 田内繁雄 自衛隊中央情報部 1佐

： 紅 小雪 警察庁特別治安維持課刑事

陽菊警察署：堀田陽 警部

日高誠 鑑識課所属 パートタイマー刑事：若い妻と娘 1歳

――――菊陽の自宅で――木山技師
 長――― ぷかりぷかりと煙草の煙を春の空に浮かべ、消えゆく
 までボーと眺めながら、木山技師長は、これまでの経過を思い返して
 いた。 谷岡係長が、病院に来なかった日2月8日。無断欠勤の
 常習犯でもないあの几帳面な谷岡係長。。どうしたのであろうか。
 今日で一週間、連絡がまったくない。ふだんの仕事ぶりといえば、
 世の中の規範を背に抱えて行動しているような男、今更 女性との
 浮気でもあるまい。 反して外畑は、誰が考えても彼こそ失踪して
 も何等疑問は生じないような男だ。職場でも変わることはない脳天
 気、自分勝手な生き方をしている彼は家庭でも職場でも身の置き場
 がない。木山技師長は憎々しげに脳裏に浮かんだ外畑の貧相を追い
 払うのである。「チェツ どうしょうもない男が残って、あの戦力
 の谷岡がいなくなるなんて、神様はどうかしとらすばい」そう呟
 き、額に苦渋の皺をよせながら、2本目の煙草に自慢の銀のジッ
 ポーで火をつけた。遠く金峰山の方角に休日の太陽が傾くのを眺め
 ると、その手前の柿の実は赤く熟れ、その下に人の形をした人形
 のような黒い物体がぶら下がり、それにむかって真っ黒な鳥がついば
 んでいるのが目に飛びこんできた。

――――外畑の夕暮れ――――
 「明日は月曜日、パン屋が来る日だ。。。」外畑は、ぽつりと呟い
 て、ポケットに残っている500円を使ってしまおうかそれとも残そ
 うかとおおいに迷いながら、一大決心をして、パチンコ屋を後にする
 ことにした。今日はオンコール、朝から一度も呼出がなかった。
 フィーバーも勿論掛からなかった。最近、黄門ちゃまにはまっている。
 「八兵衛のばかやろー」と思いながら、妻にはずっと仕事をして
 きたとでも言い訳しようかと考え家路を急いだ。 どういう訳か外畑
 の家の玄関は内側からよく詰めてあるから、今日のねぐらの心配をし
 ながらドアを開くと案外楽に開いた。 「ただいま！今日は参った
 参った。ずーとオンコール呼ばれっぱなしで。。。」と大声出しなが
 ら、うんこ革靴を脱ぐと血相を変えた細君の青白い顔が目の前に飛び
 こんできた。「まあ、どこほつつきあるいてきたのよ。さっき木山技
 師長から電話あったけど、谷岡係長の自殺死体がみつかったそう

よ」、妻の真理子は血走った目で夫の態度を凝視していた。外畑が係長をいつも「けちゃんけちゃんに貶した言い方」で面白く話をしてきたことを思い返し、和夫は妻に「自殺の原因が自分にあると疑われていることをその態度で鋭く悟っていた。「へーそうか。そりゃ大変だったなあ」と自分の周りで起こった大事件の真相をつかみあぐねていた。（実はまだ頭の中には水戸黄門のテーマソングが流れていたのである。）事件現場では陽菊警察の堀田警部は自殺か他殺か判断に迷っていた。谷岡の死体に不審な点が一点残っている。首つりにしては、安らかな死顔の目がよっていたことだ。首つりで「安らか」で「寄り目」。うーんおかしいことだ。周りの関係者はすでに自殺で事を進め始めている。鑑識の日高は、自殺に使われたナイロン紐に付着していたあんパンのあずきに注目をした。佛はあんパンに執着していたのだろうか。死の前にあんパンを食べ、あまりのおいしさに満足して、安堵の笑いと目を真ん中にして息絶えたのだろうか。推測しながら不謹慎にもニヤニヤと笑みがこぼれた。

[続きを読む](#) [ホームページへ戻る](#)



Hiroshi Hasegawa's

私の主張

- [病院での入院患者の通信アクセスの権利化について](#)
(主張)

オンライン寸劇



勝手なリンク

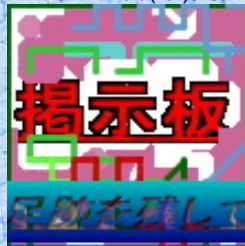
- [シニアネット久留米](#)
(とても活発です)

- [熊本シニアネット](#)
[7/1 発足](#)

(2000年11月12日(日)第二回
熊本シニアネット総会・講演会を行いました。その写真もあります。



2000年11月23日(木)更新一箇所のみ



クリックしたら掲示板へ

<お知らせ>

- ・ [最近の私](#)
(覚悟して)

福祉関連の扉

どうしたらうまく暮らせるのか

私に似合わないページです。ウェルビーイング追求のページです。福祉情報化についてのテーマでページを構成

環境問題・人権問題

水俣病・レーヨン工場での二硫化炭素中毒症など熊本に住む我々の周囲には多くの問題が存在する [詳細こちら](#)

水俣：[ともに生きて](#)

AALA連帯活動の間

熊本AALA(アジアアフリカラテンアメリカ連帯委員会は上記の問題について情報発信しています。 [詳細へ](#)
ソウル([日韓労災職業病シンポ](#))

2000年6月3日

(更新がなかなかできません)

勤労学生俺のプロフィール

2人の娘の父(実感が無い)、職業25年もの間 診療放射線技師:仕事以外のことに熱心。 [詳細を見る](#)

見日和見文芸欄

未完成の小説(?)、詩などを貯蔵しています。どうぞ試食してください。あまりの馬鹿ら詩さに圧倒されることでしょう

[詳細へ](#)

リストラ候補者の主張

●[水俣：松田寿生氏](#)
SF小説家

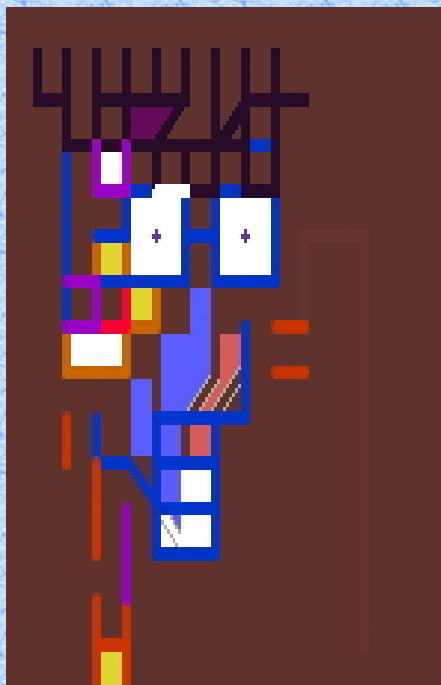
●[くわみず病院](#)

(勤務先)

●[熊本 民医連](#)
(一応職員)

●[熊本AALA](#)
(一応構成員)

Mail



俺の言葉を聞く人はいない!!いつも正論からずれているからだ。俺の主張をたまには、きいてくれ!!まあまあお茶でも飲みながらゆっくりしていいよ [詳細へ](#)

ここにもコーナーがあるんですが



NO2

同僚 浜田つららの家庭生活

同僚浜田つらは、かかあ天下で周りの男性に恐れられている。不幸にも彼女の夫利雄は何度か家からの脱出を計画し、ことごとく失敗していた。「あなた 覚えていてよ。今度は逃げだそうと考えるだけで、私、何するかわからないわよ。」。その言葉とは裏腹に利雄はその意味を充分すぎるくらい分かっていた。 たしか、あの逃亡に失敗した夜、あの責め苦は絶対、人には言えないのだが。 まず衣服をはがれ、荒縄でぐるぐる巻きにされ、大きなローソクと鞭をもったつらは、彼のおしりにローソクを垂らす。ポタリ。。ポタリ。。その度に悲鳴をあげる利雄。「もうしません許して！お願い」「だめよ そんな言い方では。。」大きな鞭が背中に絡みついた「ぎゃー！！ はい お嬢様！！金輪際！！」 / もう「九スポ」13面の世界だ。

木山の思考

これまでの経過を考えなおしてみた方がよいと堀田警部のアドバイスに従い木山技師長は2月8日のことを思い出していた。2月8日朝、谷岡は、いつものように午前7時20分、目覚まし時計に起こされ、小学5年の美土里と小学6年の美香と前後して布団を離れた。妻の真理子は近所のマーケットでのパートで9時半出勤。このごろダンベル体操をして夜更かしをすること多く、みんなが家を出たあとにごそごそと起き出す。回りの家族にとって御利益のない体操がはやって困ったことだ。 その朝は寒く東バイパスは交通停滞が特にひどかった。途中技師長に「弁当の平野」から、遅くなる故の電話を入れた。「あー谷岡ですが、えーと交通停滞で動かないのですみませんがおそくなります」「あ。分かった」；ガチャンと電話が切れた。わずかの会話の中でも谷岡の電話の向こうの緊張した息づかいを繊細な技師長は感じていた。

失踪の日前後

失踪の日以来、妻の小百合はあちこちに連絡をとるが、反応は全くなかった。警察からの連絡には、その都度がっかりさせられる。「まーだ旦那さんからは連絡なかっででしょうか」御幸交番の人のよ

さそうな50代の巡查林は熊本弁で、人の心の痛みに棘を刺す。「どうせどっか海外旅行でもいっとらすとだろたい。」林巡查は谷岡係長と外畑の〔公安（警備4課）からの配布された秘密の〕個人ファイルを取り違えていた。この公安情報とは、民主勢力の台頭を押さえるために企業家に圧力をかけたり、公務員の昇進に影響するような方法で、活動から遠ざける働きをする。谷岡らが勤務していた病院も国会に対しての署名活動や、組合活動が盛んで公安リストにその名も連ね、巡回パトカーも監視を続けていた。巡回パトカーの福田巡查と畑田巡查はこの2月8日の乗車日誌にこう記入している。「午前9時；放射線の木山技師長、空を見上げながらぶつぶつ唱えてる。アホの外畑は、今日も遅刻の模様。37才になる浜田つらははかかあ天下まっしぐら、いつものようにコーヒを挽いて苦み飛ばしのため外へ向けて「ぴゅう」と息をかける。特に革命につながる著変なし。追加であるが駐車場に谷岡係長のサニー見あたらず；久しぶりの遅刻か？。以上」とある。税金泥棒をいたく感じる公安巡查殿だ。

ついでに林巡查の手元にある、関連ファイルを覗くと。。

谷岡雄次

経歴： 性格分析： 生真面目

趣味： 描画、子育て、料理

職歴： 診療放射線技師

家族： 妻 真理子と2人の娘

持病： 高血圧 便秘

弱点： 論理的思考が苦手、感情が優先 取り込み方： かつと怒らせるとこっちのもの

手を出そうとしたところを公務執行妨害で捕捉可

小者だから価値は少ない。

木山武雄

経歴： 性格分析： 正義感にたける。論理的思考と社会分析力あり。

趣味： 世のあらゆる趣味を持つ。バイク、写真、アマチュア無

線、パソコン、登山、アウトドア、

職歴： 診療放射線技師 日本共同党専従歴あり

家族： 妻 香織 二男、二女

持病： 神経の細やかさからくる胃潰瘍 弱点： 妻に頭があがらない

取り込み方： 同じ趣味の段階で接近、安心させて取り込む。
法人トップに立つ器；協力者に育てることが有利

外畑和夫

経歴： 性格分析；だらしないオジサン。日和見主義者

趣味： 狭い視点で深く、短期間で飽きる。最近はパチンコも飽きている。

旅行が好き： みんな労働中の状況下のごちそうがたまらないという。

日本共同体に対しては共感的だが徒党を組まない主義。 警察や公権力には批判的。

組合のデモの際公安の向けるカメラにいつもチーズとVサインをおくる変人

職歴： 診療放射線技師 他に選択の余地なし。（他の仕事は、続かない）

技師長より「仕事もう辞めたら」とのアドバイスにも耳をかさず。

持病： 細かい仕事が出来ない機能障害 回復の可能性なく進行中。

弱点： 行動パターンが規則的でない。予見出来ない行動多い。特に筆順の再現性なし。

取り込み方： テンポを相手にあわせるとこっちが取り込まれそう。

要注意人物

接近しないほうがよい。

まだまだ続きます：[続きを見る](#)：

[つまらんぞお！ もうホームページへ帰る](#)

No 3

麗子の心あたり-----

綾野小路麗子は、肉体派の女だ。もっぱら大学時代は土方のアルバイトに精出した。筋骨隆々、職場では一番の力持ち。自動現像機から溢れて溜まる現像、定着液のポリ容器を回収用器に移しかえるのを日課としている。外畑同様、谷岡係長とはあまり意見が合わなかった。「だって、なよなよした男って嫌いなものよね」口癖のように谷岡を常日頃批判していた。いつだったか病院内の同僚に「谷岡係長っておかまだってよ」という噂を流した張本人だったこともある。噂とはこわいもので外科の田鳴医師の耳にも届いて真相を確認に来たこともある。ある日、つかつかと放射線科の技師室に谷岡を訪ねてきてこう言った。「君もそうかい。ぼくもそっちの方なんだよ。なあいいだろう」と田鳴医師が両手揃えて谷岡の右手に触れようとする、谷岡は真っ赤に変身した。「先生！それは、勘弁してはいよー、おらー妻子もちで、そんな恐いことできません！！」と頑なに拒否の態勢を固めた。「そうか、回りに人がいるから、恥ずかしいんだろう、またあとでね」と勝手な解釈をし強烈なウインクを残して田鳴医師が立ち去るまでの間、放射線科の一同氷のように身動きできなかった。そんな経過もあって、谷岡係長の失踪の責任は、彼女自身もひどく心当たりがあったのだ。

-----話を元へ戻

そう-----

あの日の朝、谷岡の車は、「弁当の平野」を出てどこへ行ったのだろうか。しかも数日、どこかで生存していたのは確かである。鑑識の日高が検死官から聞いた話では、柿の木にぶらさがっていたのが発見されたのは死亡後6時間経過だという。謎は深まるばかりだ。堀田警部は、交通課の路上モニターカメラ分析を依頼した。「はい 2月8日午前8時半から9時にかけて、川尻方向より神水交差点方向；斉藤橋設置のモニターに日産サニー63年式熊さ23-32、色は灰色人相はこれから電送しますが口がでかく、鼻の下が長いのが特徴。この人物の通過時間を割り出し、県内各モニターからも情報を得たいのでよろしくお願いします。」堀田は律儀な男だ。一言も過不足のな

い問い合わせをする。 10分の後、その車は通過していない由の連絡があり、県内の他のモニターにも全く、記録が無いことが判明した。「そうか 職場には向かっていない、刻一刻と国民の動向を監視している路上モニターの視野からも外れている。すると。。。我々の網をかいくぐる組織に拉致されたのかもしれないな」堀田の言葉に日高はきょとんとして「警部、 そんな、熊本の田舎もんば拉致して、何の役に立つんですか」そういい放ち、「うーん わからん」、続けて「理にかなわん推測はやめて、もう自殺に決着しましょうよ」と付け加えた。日高は少しでも理解に苦しんだり、矛盾が出るとそこで思考を停止してしまう。学校時代にも数学が大嫌いだった。今この職業についてその過程が特に大事な部分で悩まなければならないのに彼はすぐに安易な決着をつけてしまう。「君、この仕事に向いてないのと違うか。さっさと転職したほうが君のためだよ」堀田は日高に率直に問いかけた。「警部 そう言われても、私に合った仕事があるでしょうか」日高は警部に食ってかかる。「日高君、実は転職の話があるんだよ。警備4課を知ってるかね」「そんな部署あるんですか」「そりゃ とても面白いところだという話だよ。飲んだり食べたり、ゼーンぶ税金だからね。それが仕事なんですよ」「へー警部、それ楽しそうじゃないですか」「じゃ今度話をつけときましょう。さて君は今回の事件を自殺と断定したがるのだが、他に気づいたことは無かったかね」仕事の核心からどんどん離れていくのに気づいた警部は会話の修正をしなければならなかった。「そうそうこの事件で私がおかしいな と思ったことは、首つりでのあんな安らかで目を真ん中に寄せた佛さん、初めて拝見しましたよ」日高はあの情景を思い返しながら笑みを浮かべていた。「それにロープに付着したあんパンのあずき」「お いいところに気づいているじゃないか それであずきの足どりは追ったのだろうね。」「勿論ですよ。無花果ベーカリーで作られた、フランスパン生地のあるパンのあずきと判明しました。」「無花果ベーカリーか。 ああ確か、あの外畑の勤務する心酔病院に毎週月曜日毎にくる例のパン屋ね」そこで2人とも初めてその事実の重大さに気づくのだ。「日高君、無花果ベーカリーの関係者に当たってくれ」「はい分かりました。 あ..それに警部、さっきのご馳走食って税金払いの警備4課への転職の件、よろしく願いしますよ」

陽菊警察の玄関を一步出れば日高の天下だ。

「鑑識の警察官が立派な刑事に変身ってこった。」にたにたしながら、彼のマイカーであるトヨタマーク（ガス改造車）に乗り込んだ。庶民から見れば警察手帳を見せられると、どこ所属かも気にするものはない。熊本市内へ出る東バイパス沿いには大型店舗が多い、甘党の店「ミセス ミニマム」とか、「スモールロード」とかいう安売りの店に勤務中、寄ってみたくなる。無花果ベーカリーはその並びにあり、直営店のドーナツの販売所も有名である。「御免ください。」

「いらしゃいませ、何にいたしましょうか」マフィンのような笑顔のかわいい16、7の女の子が対応した。「警察のものですが」と警察手帳を出して見せると、みるみる女の子の顔から血の気が失せた。

「きゃー 御免なさい。もう分かってしまったんですか」高校生は昨日ボーイフレンドが冷やかしに店に寄った時、オールドファッションという、ドーナツの原型みたいなのを5個、金も貰わずに渡したのがばれたと思った。「もうしませんから許してください。」日高は「この子何を勘違いしているのだろうか」と訝しく次の言葉が出て来なかった。双方の長い沈黙が続いた。次第に日高は日高で、「この女の子が外畑失踪に一枚かんでいるのではないか」と疑いはじめた。奥のほうから女主人がその気配を悟って駆けつけた。（以降 訳あってこの場では詳しく述べられない。後編にご期待を：）

[続きを仕方なく読む](#)：

[もうホームに戻るバ](#)

[イ](#)

No4

-----葬

式-----

谷岡の父72歳、母70歳。親はいつまでも親であり、谷岡の身を案じて生きてきた。変りはてた我が子と対面し、葬式の日、悲しみのあまり、始終笑っていた。「あっはは 親より先に逝くであろうか。なあ あはああはは」「そぎゃんたい。親に黙ってはってくなんてえあろうかい あっはは」大衆の目は老いた父母の悲しみよりもまず当面は小学校5年生6年生の2人の遺児の、涙をふきながらの弔問客との対応に注がれていた。

「お父さんの好きだった中島みゆきのテープを棺に入れてやるね ねえちゃん」「そうね それから 買ったばかりのノートパソコンの説明書もね。」

「お父さん、少しもマニュアル見らっさんだったけん、今度は退屈だろうけん、ちょっとはあの世で勉強してもらわんと」

足元には谷岡のお腹の上が好きで、ストーブによくあたりに来ていた隣家の猫のタマが近寄ってきた。「タマ ほら おとうさんよ かわいそうに解剖されて包帯でぐるぐる巻きにされて」「タマ さいならしょうね」妹はタマを抱え上げてその猫の手を父のほっぺたにくっつけた。猫は爪を引っ込めなすがままにされている。猫も人の死を知っているのだろうか。抵抗も能動的な身動きもせず子どもの動きに合わせていた。

端で見ていた妻の小百合はその場に泣き崩れた。「お父さん、いっしょにソウルに行こうてゆうとったのに。どうして自殺なんてしたのよ。馬鹿馬鹿！！」子ども達も母の肩を抱えて泣きじゃくった。その光景を目撃していた同僚や近所の弔問客も言葉をかけることが出来なかった。読経が始まった。それぞれ場所を譲り合いながら湿っぽい畳に座った。その参列者の心の中を覗いてみよう

・向かいの60才の 田中爺さん「いつも佛さん、家におらっさんごたったばってん、こぎゃん美人の奥さんもらってうらやましか。これからちょっとばかりお近づきになるおうっと！」ルンルン気分だ。

・鑑識課 日高「おかしいな あんな若い奥さんに、大きな子どもがいる。2号さんかもな。あとで戸籍を調査して、本妻なのか確認

しょう。他に不審人物はいないだろうか」

・同僚 外畑「ああ せいせいした。もう係長に怒られずにすむ」

・妻 小百合「早く葬式が終わらないかしら。死んでくれたおかげで生命保険はザクザク入ってくるし、あの人もやっと人の役に立ったわね。これで自由の身だわ。まずあの男とよりを戻してっと。我慢のかがあったものね。笑いをこらえるのも大変だわ。」

・猫のタマ「今日はご馳走がいっぱいありそうだけど、好物のお魚がないわね、にゃん」

・遺児 長女 美香「継母のいじめが恐いわ。家出しちゃおうかしら」

・遺児 次女 美土里「お父さんの生命保険をあの女（継母）に横取りされてなるもんですか。とおちゃんの名にかけて！！」

-----付箋-----

寒さも揺らぎ、梅の花がポツポツと開化する頃、西原村俵山山腹にある陽菊警察は、活気にあふれた人並みに埋もれた。3月に入ると陽菊警察の捜査本部は自殺を殺人事件に切り替えてマスコミに発表し堀田警部が陣頭指揮に立っていた。記者会見の席上 堀田は重大な事実を漏らしたことが騒ぎの始まりである。

「えーと これからはオフレコということでおねがいしますよ。」

「当日の谷岡雄次の足どりが途中まで解明されました。」

「2月8日 午前7時47分に家を出た谷岡は、東バイパスに8時10分に出ていて途中の御幸小学校前―旧浜線―東バイパスと時間を裏付けるように目撃者が存在します。そしてバイパスを北上し多井の島交差点で停滞車両の最後尾に並びました。この車の位置は進行方向が赤信号に変わり道路下り嘉島方向を塞ぐかたちでありました。これは県警の交通モニター装置で確認出来ています。この交差点に新入し嘉島方面へ直進しようとしている黒塗りのベンツ車が先頭で、道路が塞がれ、嘉島方面も停滞が生じはじめました。ところで、この停滞が一時解消され、谷岡のサニーが進行した直後から、ベンツが方向指示器も出さずサニーの直後に密着してついて追っている様子がカメラに捉えられています。」

「このベンツのナンバーは死角で不明ですが、他のモニタにも同時刻以降目撃されていません。以降、このベンツの行方を追うとともに

に、殺人事件として本格的捜査に着手してゆく所存であります。」

[仕方なく続きをみる](#)

[もうホームへきゅー戻る](#)

No 5

- - - - - 日高の追及 - - -

やっとわかったぞ、谷岡の妻はZ K C I Aの回し者だった。パソコンを前にした秘密のインターネットの回線のリストを見つめる日高の勝算は間近のようだった。「堀田警部 谷岡の細君のことでちょっと話があります。」「戸籍とか出入国管理の記録によって判明したことを申しあげます。谷岡は前妻李恵、との間に2児をもうけています。ところが2児出産直後の医療ミスによって失血死しています。」「それで。。」堀田はわが身に振り返って、素直に谷岡に同情していた。「はい、彼にとっては相当のショックだったみたいで、精神科の陽菊病院にうつ状態で入院していたこともあります。」「その時、接近してきたのが、現在の妻であることが判明」「日高君、で細君も入院してたのかい」「いいえ、細君は、絵画の指導に来ていたそうです。」「でも、どうして接点があるんだい。彼はうつ状態、絵画は分裂病などの作業療法で採用されているプログラムじゃないのかい。」「警部、どうして、精神科にそんなに詳しいんですか。はいっていたことあるんですか。凶星でしょう」堀田の表情がみるみる変わった。日高はしまったと思い目を閉じた。しばらくの沈黙のあと、堀田は喋りにくそうに口を開いた。「俺の女房は、あそこの病院の小児精神科医なんだ。それで聞きたくもない話を毎日、うんざりしながらも聞かされているっていう訳だよ。」「そうそう、昨日もぶつぶつ、言っていたなあ。あそこってC Tとか、最新設備があるじゃないか。そこの放射線技師が気の利かない人で、小児のC Tを撮ろうとすると、いつもいないのよねって。。俺にそんなこと言ったって知るかよ。」喋りながらも家庭の事を話題にだすのにうんざりした表情を続けている。日高は話題を、変えようと焦るが次の言葉が見あたらない。「じゃZ C I A絡みということで上に調査を依頼しましょうか。」「そうだな。それに自衛隊の調査局の友人にも話を通してみよう」

----- 紅 小雪警察庁特別治安維持課刑事登
場 -----

紅 小雪（くれないこゆき）は、長崎、香焼町の出身。空手5段、柔道3段、書道準3級。愛読書「キャンディ・キャンディ」「15少年漂流記」。警察では唯一、世界中の法律を守らないでよい部署の、エリート刑事。キセル乗車で今日も快速通勤だ。ともすれば下品になりかねない真っ赤なチャネルのスーツを着こなし、胸にはちゃんと銀ぶち蛍光塗料製の「治安維持課刑事」のワッペンが派手派手に輝いている。電車に乗るときも車掌が敬礼をする。時には電車の運転手が、運転台から離れて挨拶にくる。そんな時には2、3箇所の駅を通過してしまう。しかし彼女が乗車していることが判明すると全くおとがめなし。通過駅の駅長がホームで笑顔で手を振っていた。そう彼女は特別なのだ。治安維持課に着くと、1通のファックスが届いていた。「研修で一緒だった熊本の堀田君ね。相変わらず、出世していないわね。なにになに、柿の木で首つり死体で発見された男が何らかの情報機関に殺られた可能性がある。。ふむふむ。。。」

—————田内繁雄 自衛隊中央情報部 1佐：登場—————

田内繁雄は、「高倉健を地でゆくような男」、無口だが堀田が信頼するピカールの現役のスパイ。モスクワ大使館やアメリカ大使館の駐在武官を勤めたこともある有能な男だ。堀田が彼に電話をかけたのは5年ぶりだ。「もしもし、熊本の堀田です。暗号名S P I I Dは0014777です。田内1佐をお願いします。」自衛隊情報部の電話アクセスは、非常に気を使う。勿論、絶えず掛かってきた電話の発信元の逆探知はされている。暗号や発信者のIDを告げなければ電話は接続拒否される。（繁雄のIDは自宅電話番号の下7桁だった。嚴重機密なはずなのだが、笑える。）

「あー 陽ちゃんね。久しぶりやんけ われーどこから電話してけつかんねん。」無口な訳は河内弁しか使えないからだった。英語、ロシア語、スペイン語、イタリア語、ドイツ語、中国語、韓国語、ヘブライ語、ギリシャ語、ヒンズウ語、タガログ語、スワヒリ語、タイ語、ベトナム語、喃語。。あらゆる言葉に長けているのに彼の話す日本語は品の悪い大阪でも最悪の河内弁だ。

「おお 繁やん、じつはクサー、ちょっと頼みがあるとばってん、熊本にでてこんや」堀田は熊本でも最低の（盗人島近くの）河内弁だ。

「陽ちゃんの頼みなら、今すぐいくやんけ、ほなさいなら」と電話は切れた。級友とはすぐに話が通じる。ほっとした堀田だった。

かって、田内と堀田は。。熊本健軍自衛隊に転勤で勤務していた父親

の都合で、無認可保育園「鳩ぼっぼ」保育園いちじく学級と同級生だった。父親の転勤で大阪河内駐屯地に去ったあとも手紙を30年間もやりとりしていた仲。

田内はロシア勤務時代に貰ったミグ27に乗り込むとさっそうと熊本空港に向けて出発した。途中、あちこちからスクランブル出動で同僚機が、捕獲に駆けつけるが、ミグの背中に小さな日の丸を見つけては退散していく。（お子様ランチについてた旗らしい）「もう人騒がせなやつ！」僚機の交信を聞きながら、「うふふ」と声を発し笑った。眼下に西原村の陽菊警察駐車場が飛びこんできた。東京の自衛隊の管制室に「俵山に着陸する」と連絡をして、エンジンを切った。

「ちょっと待て」という声を聞く間もなかった。すると、ストーンひゅるひゅると大きなパラシュートがひらいてミグは無事、日高のマーク2を押しつぶしながら着陸に成功。東京への帰りはどこかでアドバルーンを飛ばらって上昇したところで全速エンジンをかける予定だ。署員一同笑いながら見事な着陸に拍手を送っていた。一人、泣き面の日高をのぞいて。

[続きを読む](#)

No 6

- - - - - 解決へ一歩前進したのだろうか？ - - - - -

----- 捜査開始される。 -----

ミグで到着した田内繁雄 1 佐が到着した頃、日本航空にキセル乗車し熊本空港に着いた紅小雪治安維持課刑事も空港から警察署前まで勿論無賃乗車して、タクシーから降りようとし運転手と言い合いをしていた。

「この胸の「治安維持課刑事」のワッペンが目に入らないの！！」
 「なんだその派手派手ワッペンは。。それがなんかい。はい空港から警察署まで780円 はいよ。」と言って料金板を指さす。 紅刑事の頭の中では（熊本は日本じゃないんじゃないかしら。治安維持課刑事の仕事知らないなんて。もういや！！）通常のテンポで事が運ばないのにあせっていた。「なんて事いうの、私は日本を守る仕事をしているのよ。お金なんて払えないわ。」「なんばいいよっと！俺は一家を支えるために仕事しよっとばい。当然の仕事に金はらわんなら警察に突き出すばい」

「そうだわ 突き出して頂戴」駐車場のミグ27の回りの人だかりの一団から堀田の目は、紅刑事を突き出そうとするタクシー運転手の2人の動きに気づいた「おお 紅刑事、お待ちしていました。」一団の警察職員もあわせて彼女に最敬礼を送った。

タクシー運転手はたまげた。この女何者だろうと思案しながら、「じゃ、もう、よかばい」とあわててタクシーに逃げ戻った。タクシー無線で本社に報告したら、配車係は、「じゃあとで集金に行くよう手配する」といって無線を切り、運転手同様その現実が全く分からなかったようだ。

----- 心酔病院の職員の面々の調査結果を堀田警部は読み上げる -----

— 「彼の勤務する心酔病院放射線科の技師室のメンバーを紹介します。」 「まず技師長の木山陽一は46才：偶然にも第一発見者です。偶然同僚の死体を見つけ、警察に報告したことに僅かではありますが、

疑いを持って調査しました。結果は完全に白。47才の妻、男児2人、女兒2人の家族がありますが、特に家族関係に問題ありません。」

「なお彼の直属の部下が今回被害者の谷岡雄次42才：几帳面な性格、人相が不自由な点以外問題行動はあがっていません。家族は美香12才：美土里11才：妻 小百合25才 なお妻は韓国情報部の関係が浮かび上がっています。」 「また被害者の同僚の、綾野小路麗子23才；自称グラマラス美女、それに浜田つらら37才は家族に対しては少々暴力的。内づら、外づらを使い分けるのが上手。今はやりの27才の年下の夫を持つ。：同僚で一番理解しにくいのは 外畑和夫40才；だらしのないオジサン:遅刻常習者で、その妻真理子38才からも愛想をつかされています。」 「これまでの経過は別紙にタイプしてありますので参照ください。なお今回この事件が某国情報部門の関与が考えられますので、東京から専門家2人の参加を得ることが出来ました。」

「ここに田内繁雄 自衛隊中央情報部1佐と紅 小雪 警察庁特別治安維持課刑事を紹介します。」 と同時に12人の担当刑事に拍手で信認された。

田中1佐「紹介の田中と申します。以上」 これくらいの短い会話では河内弁は隠しおおせる。

紅刑事「紅です。早速ですがこの調査の件で、ちょっと疑問があります。」言葉は冷静で知的だ、「日高さんにお聞きしたいのですが、被害者のサニーと追跡車のベンツのその後 状況はどうなっているのですか。」

ミグにつぶされたマーク2のローンの勘定で頭が一杯の日高が開口一番に「その前に私の車はどうなるんでしょう。」と特別参加の所長に懇願の泣き顔を見せた。

「まあみんなでカンパを出し合うってどうでしょうかね。とりあえず所長の私が2000円奮発しましょう。ねえみんなよろしくね」「私は360円」と次長が声をあげた。

「私が次長を超えて出したら気の毒だから300円」と以下余計な譲り合いの結果3212円集まっただけだ。

日高は涙声で説明を始めた。

「日産サニーについては、なんと陽菊警察署の駐車場に堂々と事件直後から駐車していることが昨日判明したところです。なんとというか、灯台もと暗しというか、国民監視に力を入れすぎ、我が駐車場を調査していなかったと、もはや署長は首にしてはという声もあります。あ。。これは、単なる本官のアイデアですが。。」と先ほどのカンパ額に恨みを込めた発言をした。「なんと愚かな捜査会議だ」スパイのプロは呆れていた。

紅刑事も真紅の口元を歪めながら「ではベンツは発見できたのですか。」

「それがですね。資料にありますように、カメラの死角の関係でナンバーが見えない状況でしたので、その時間帯に現れなかっただけでして、これがどこの県のかも特定出来なかったんですよ。あっはは」もう日高はやけくそだ。

アホでいっぱい陽菊警察で唯一のピカ切れデカ堀田警部は滑らかな標準語がしゃべれる。田内繁雄自衛隊中央情報部1佐の語学力にはかなわないが、古典日本語から現代日本語まで完全マスター。はては喃語や、犬猫、小鳥語にかけては天才級。生後3、4ヶ月の捨て子の父母の捜査では、赤ん坊に喃語で「ブーブーブーブ」(あなたのお母さんどこ?)と声かけしては「バーバーズズズ、マーマーゲロゲロ」(お父さんがお母さんに中絶を勧めたのに、ママは私を産んでくれたの)、「おーそうかい、そうかい。可愛そうに」「デデママビュンビュン(ほんで、ママどこにいるの?)」、「ママコキュウチェブブ(ママは高校生、車でナンパされたの)」「パパブユン(パパは誰)」というと遠巻きに見ていた日高を指さし、無事捨て子事件を解決した実績もある。身内の恥じばかりが出てくる陽菊警察の話はこのくらいにしておいて。

もう一つの彼の文学的才能は県下にも知れ渡っている。「痔と仁術」という一風変わった名の文学結社に参加して、いくつかの作品を発表している。その関わりからある事実を発見した。堀田警部は、周りを見回し「実は、私の加入している趣味の雑誌(痔と仁術)というローカル文芸誌に被害者谷岡の文章が乗っていたんですよ」「これを私なりに脚色し、皆さんに紹介しましょう。」「なお名前は該当者の名前を当てはめています。原文とは少しずれた内容ですが、粗筋と

思っご勘弁ください」と言っ、前日徹夜してワープロでまとめた文集を配布した。

配布され、さっさと各人目を通していたが、読みおえた署員はひそひそ話が聞こえてきた。しかし日高は最後まで行き着かないうちに眠気が襲ってうつらうつらと前に大きく仰け反った。

[続きを読む](#)

No8

-----「痔と仁術」1987年2月号から-----

--- 谷岡雄次の秘密 - - - - -

ソウルの冬は冷たさが厳しい。凍る河が凍らなくなったのはコンビナートが付近に出来その高温の排水のためである。同時に首都には人口が密集する。彼らの生活によって、徐々に自然環境が変化している。しかし大きく変わったのは河の水温が上がっただけで、冬の普遍さは変えようがなかった。外畑和夫が、ソウルの土地に最初に来たのは技師養成所の学生時代である。21歳の時、小川出身の在日韓国人Hが冤罪で逮捕され、密かに彼の回りの支援者によって送られ情報を得る任務だった。当時の技師養成所は政治に殆ど左右されなかった。学生運動からも孤立し、放射線技師ほど政治から遠くに存在し孤立した職業は、見あたらなかった。徒弟制度の中、保守の枠組みからはみ出ない工夫もそれを支えていた。教授の一言で、大病院へ就職出来、その陰の力で職業的な抹殺もできた。つまりボス政治支配に隠れて技師の卵の政治的関心を遮蔽していたのである。長老は「和」を唱え、出る杭を打ちのめした。時の朴政権は、北との臨戦態勢の維持のため、社会主義に対して絶望を大衆に与えるためのあらゆる工作をおこなった。入国の際にも厳重な調査をおこなった。何人の人が入国審査で追い返されただろうか。また入国後も絶え間ない監視の目がついた。時代はベトナム戦争末期、韓国も米国の経済支援と交換に、兵士を参戦派遣していた。ベトナム戦線ではチョンドファンを指揮官とした蒙古師団が暴れまくっていた。谷岡について日本でのZCIAの隠密の調査でもなんら不審さは見られなかった。単なる観光客として入国が許可された。日本からの観光客に発給されるビザ申請書類には過去へ遡って「日本共同党への加入の有無」や「共産圏国への入国の有無」の記入欄があった。いずれも無と記入し入国を許可された。学生はいい隠れ蓑になった。

代――

彼が学生時代過ごしていた大阪生野区では、チマチョゴリを着た朝鮮学校女学生の通学生と肩を並べて座ってもなんら違和感ももたれることはなかった。李恵はアパートの隣人の娘で、18歳の高校生、隣のよしみで駅から一緒にくだらない話をしながら帰る機会が多かった。谷岡の月4500円の2畳のアパート2階2号室は共同トイレの隣、ベニヤ板1枚で異臭を防いでいる。それでも異音はかまわず筒抜けに進入してくる。そこで、たまらず窓を開けるとそこにニコリと笑いかける恵がいた。臭い出会いだっただが、それからの毎日は楽しかった。李恵は日本中にいるふつうの女の娘と変わりなかった。両親が在日というだけだった。しかし一本、祖国愛という芯が備わっていた。「私、いつか祖国に帰って、そこで一生懸命働いて、同胞と結婚し、子どもを育てるのが夢なのよ」、「まあこれ90%は両親の希望なんだけど。でも学校で習ったハングルなんて祖国では通じにくいし、馬鹿にされると思うの。夏休みに、ソウルの親類の家に行ってから、そこで鍛えてくるわ。あなたにおみやげ買ってくるから楽しみにまってね」そう言った会話を、思いだしながら、彼女の帰国を待った。しかし、とうに夏休みは終わり、初秋になっても帰ってきた気配がなかった。アパートの窓を開けても恵の窓はカーテンが閉められたままだった。李恵の両親は近所で焼き肉屋をしていた。10月のある冷たい雨の降る夕方、思い切ってその焼き肉屋に足を運んだ。「おお恵の友達がきはったわ」父親が声をあげ、母親が首を回して振り返った。「お久しぶりですなあ、谷岡さん」これまで彼女の両親には、直接話す機会が無かったが、情報は娘経由で伝えられていたようだ。急な応答に戸惑いながら、「ああ こんばんわ。すみませんが、焼き肉定食を1つください。」980円は、谷岡にしては久しぶりの大奮発だ。熊本からの今月の仕送りの最初の出費は、まずごちそうにありつくことに決めた。「へーい 焼き肉定食やね」うんと頷きながら、漫画本をあせり、自席についてぱらぱらめくりながら、なんとも落ちつかない。「おじさん、恵さんは、まだ帰らないですか。」急に両親の顔色が変わった。店の玄関を見て、あたりに人が居ないことを確認して小さな声でつぶやいた「恵は、可哀想に再入国出来なくなっただ。まあ、ああいった情勢だから仕方ないんやけ

どな。」 「手紙も満足に出せないみたいだわあ」「日本の戦争中の頃と変わらないね。」「そうそう、谷岡さんにおみやげ持って帰れへんでごめんってあやまといてと2、3週間前に来た手紙に書いてあったわ。なかなか伝える機会が無くて遅れてごめんしてな」

「そろそろあんたも卒業やる。学校の勉強頑張ってるな。」そうか帰れなくなったのか。深く追求は出来ないものの、何か訳ありなんだろうな。明日はひげゴジラの放射化学のテストだし、焼き肉でも食べて勉強しようかな。でも張り合いなくなったなあ。谷岡はじぶんでも思いがけず落胆していた。「はあい出来上がり、ビールはサービスや。恵に伝えたいことあったら一緒に手紙に入れて出してあげるから、書いたらもってきてい、遠慮せんといてな」「は、はい」

「どうも検閲されているみたいやから、内容には注意しとき。それにあんたの名前や住所は絶対書かんといてな。物騒やさかい。」

「じゃ どうだい朴賢美なんて名ででしたら」「おまえさんその名前どっかで聞いた名前やね。あ そうそう私と結婚する前につきあったいた女の名ににとるなあ」「ちえ おまえつまらない事ばかり覚えているやん」「なんだって、そっちこそ・・・」2人のじゃれ合いはエスカレートするばかりだ。そこへ運よくアベックのお客さんだ。「えーらししやい」「お久しぶり、祖国に帰られたんとちがう?」「実は、兄が大変な事に巻き込まれまして、こちら兄のフィアンセです。」どこか恵の笑顔を思い起こさせる様な女性だった。

—————「痔と仁術」87年3月

号—————

しかし彼女の日本再入国はいつまでも実現しなかった。李恵はソウルの高校に途中で編入することになり、父の弟の家に居候することになった。 いづれにしても日本の朝鮮人学校の高等部を卒業しても日本の大学の受験資格は無かった。日本では高等学校とは認めていなかったためだ。彼女はいずれ、祖国の大学を受験するつもりだったからそれがうまい具合に半年の準備期間となった。渡りに船の案配だった。全てハングルの試験は、あまり会話の出来ない彼女にとっては苦痛だった。時には日本の歌謡曲をと、ラジオの中波1200KHZあたりのお阪毎日放送などを受信しながら、勉強に没頭した。

ちょうど日本ではピンクレディが流行し始めの頃だ。はげちゃび

んの「チャッピー」と「キャシイ」というラジオのパーソナリティが会場を爆笑の渦に巻き込み進行した番組も彼女が大阪時代夢中になっていた番組だ。冬場は遠い地のラジオが良くはある。大きくなったり、小さくなったり、時折北京放送の巨大な電波に踏みつぶされそうになりながら。

ただ気がかりがあった。それは誰にも悟られてはならないことだ。日本の番組を受信することさえ禁止されている軍事政権下、いつもイヤホーンで家族に声が漏れないように苦勞し、笑いも布団の中で噛み殺していた。翌年の春、第一希望のK大学歴史科に入学した。

合格を喜んでくれたのは大阪の家族だけではなかった、李恵は第一外国語に日本語を選択した。この時間だけ、自由に日本語が喋れる。同級生は羨望のまなざしを送る。講師は日本に留学したことがあるといっても少し本物と違う。難しい時に講師の視線は李恵に当たる。李恵はこの時間は、優等生なのだ。しかし他の講義は友達のノートをまた書きして理解していた。 -----

[続きを見る](#)

No8：登場人物、施設名など、全く架空です。たとえ似ていても実在しない虚構です。あしからず。

ソウルには連絡がついた。空港からホテルまでは韓国側の日本語案内者がつく。臨戦態勢なので、軍人の乗った軍用車が目につき異様な圧迫感を感じる。ソウルの繁華街をぬけると名門新羅ホテルにつく。明日からの行動を打ち合わせを済まし鍵を受け取りほっとしていると、自分の名前を呼ぶ声がある。声の方を振り向くと、ロビーに見慣れた李恵のはちきれんばかりの笑顔があった。「お久しぶりね、1年と7カ月かな」「部屋に荷物おいてくるから、ちょっとまっとして」「部屋の番号は?」「オー、ユク、パル(578)」覚えたてのハングルで谷岡雄治は大声で応えた。「私もいっしょにいくわ。もう随分待ったんだから、もう待つのは飽き飽きよ。」エレベータの前でさっき同乗してきた同じツアーの中年のおばさんがいやらしそうな目つきで2人をじろじろ見ている。

「ほら、あれがキーセン旅行っていうのかしら。若いのに男は、みんな一緒みたいね。」「それにしてもあの娘さん、商売女には見えないわね。まるで女優さんよ。清楚なふりして、もうやーね」中年女性の会話はひそひそでなく、ずけずけと聞こえてくる。一同さっさとやって来たエレベータに乗り込んだ。あの中年女性らは相変わらず、ぺちゃくちゃ小言に喋って、ちらちらこちらを見比べている。

李恵は頭にかちんときて「私、そんなんじゃないわ。ソウルの大学に留学している学生です。商売女ではありませんからね。もう失礼しちゃうわね。」はっきりした娘だ。さっきの中年女性たちうつむいてしまった。

「あ・・・そう、学生さんかなと。。そうじゃないかとね ね 今そう思ってたんですよ。 ねえ多美子さん」

「そ、そうですよ」「あ 5階ですよ。じゃ失礼します。くれぐれも誤解のないように、ではさようなら」へんな洒落を言ってエレベータを降りるまで李恵の独演場だった。

「578号室、どうぞお客様こちらです」李恵が案内嬢の口調でおどけてみせる。谷岡が、鍵をあけて中に入るとシングルにしては広い部屋だ。李恵は、先に立って、窓のカーテンを開くとソウルの夜の街

並みが綺麗だった。外のイルミネーションを見つめる李恵の横顔が、とても綺麗なことに、谷岡はその時やっと気づいたのだった。こんな間近で肩を並べている・俺はこの娘の友達というだけなのか・心は揺らめいていた。

次号 87年5月号に継続掲載予定

 以上で終わっている。その後のあらすじを手短に堀田が説明を続ける「かつて、谷岡と李恵は、運命的な出会いをして結婚。幸せの絶頂のあとの離別を経験。2人の愛児をかかえてシングルファザー路線を歩もうとするが、金で雇われて、後妻に来たのは、ZCIAの息のかかった小百合。という設定でした。」

「小百合の仕事は、すばらしく均整のとれた身体とテクニックで谷岡を誘惑する事から始まった。まじめに生きてきた谷岡にとって、それはあまりにも刺激的な事だった。谷岡の血圧は上がりっぱなし。このまま息絶えるのか。」婦警の山田の想像力は逞しい。（この3行：ヒステリー作家山田一代「官能の世界」から借用）
 「非凡な才能を持つ小百合の運命はいかに。」

「なるほど、単なる小説にしては、彼の行動が一致する部分が多いわね」紅刑事は、アンクレットを鳴らしながら足を組み直し、さらに続けて「で、このあとの掲載予定の原稿はどうなっているの」と其の綺麗な容姿に似合わず厳しい質問を投げかけた。
 「このまま、小説を鵜呑みにされては困るんですけどね、李恵に対する感情や、その後の2人の関係は暗示されています。また大阪の学生時代の背景も、ほぼ事実一致しています。」

「ただ、気になりますのは、（大阪時代）の項目のラストの部分で{実は、兄が大変な事に巻き込まれまして、こちら兄のフィアンセです。}という紹介の部分ですが。。ちょっと問題を投げかけ終わっています。そのあとの次号の部分との整合性が見られないのですね。」堀田の説明の仕方はちょっとした文学論の講義のようである。

「へー、あいつこんな七面倒くさいのが趣味だったのか」と田内1佐は、堀田の隠された面を知って感動していた。紅刑事はうんうんと頷いて次の展開に期待をかけて聞き入っていた。

堀田は「それから。。」と言葉を濁した。「この原稿執筆中になんらかの心的変動があったのではないのでしょうか。」心理学における潜在意識の表出の事である。「人は何か興奮する時に潜在的な禁断の秘密を心底から浮かびあがらせませす」と言葉を発しながら、じろりと居眠りを続ける日高に注目した。「ちょっと実験してみますが、よく見ていて下さい」

そっと日高に近づいて「おい、起きろ。犯人はおまえだ。」すると、びっくり飛び起きた日高は奇声を発した「申し訳ありません、署長の車のタイヤに釘を打ち込んだのは、悪気はなかったんです。ただむしゃくしゃして。。」と言いながら意識が正常に戻りかかると「いや、寝言寝言、冗談ですって、もうみんな本気にしてもお。。」ととりつくろう。

署長、あわてふためいて、駐車場に駆けもどったが、後の祭りだった。中古で買った、オンボロカローラは前輪が両方パンクしていた。署長は大声で「やられた、もうさっきのカンパ返せ」「凶悪犯、死刑じゃ お前！！」と日高を責めての内輪もめが始まった。

「まあまあ、このように普段の生活では秘密にしているはずなのが、突然の状況変化によって、あるいは異常な状況下において、潜在思考がひょいと飛び出してくるもんですよ」と堀田も想像しなかった混乱を鎮めようとやっきになった。

「へいー皆の者、控えおろう、こともあろうに東京の紅刑事と田内1佐の前ですぞ！！」

「頭が高い、控えおろう」やっこのかけ声で事態は鎮静した。

下巻へ続く：是非読んでね。超SFファンタジー、純愛、刑事物、アクション、何でもありの奇想天外、天地無用、人畜無害の「ピンクの泪殺人事件」にご期待ください。予告編： 谷岡失踪の謎は解けるのだろうか。ノはたして謀略機関のしわざなのだろうか。。。ただいつ完成するのか、目下不明、時々、ここものぞいてね！

[ホームへ戻る](#)